日本語教育と異文化伝道 ④

天理教語学院
日本語教育センター主任
大内　泰夫　*Yasuo Ouchi*

文化活動会議

天理教海外部には、海外での文化活動に関して話し合う「文化活動会議」という会議体がかつて設けられていた。筆者は各布教拠点で行われている日本語教育に関係していたので、この会議に出席していた。その会議は各海外拠点を担当する各地域課の方々が主なメンバーであった。筆者はそれまで日本語教育の現場で授業をすることに専念し、なぜ天理教の文化活動としての日本語教育があるのかについては深く考えたこともなかった。しかし、会議を通して聞く話は、海外で展開している天理教の文化活動について興味深く、考えさせられることばかりであった。またこの会議は、筆者が海外の子弟に対して、日本語教育を行っていく上でいろいろと示唆を与えてくれるものでもあった。今回はそこでいろいろ考えたことや自身の経験をもとに話を進めていきたい。

海外布教と文化活動

海外布教というと、現地へ行って直接、現地の人に布教すればいいのではないかという人もいる。しかし国内とは違って、言葉の問題をはじめとして、他にも難しい問題を孕（はら）んでいる。文化・習慣の相違の問題もあるが、そもそも布教が公認されているかどうか、布教師として長期滞在できるのかなど、クリアしなければならないことが多いのである。短期の海外旅行で出かけるのと違い、布教となると長期滞在しなければならない。そのためには現地にある程度、長く滞在できる方法を考えねばならず、また布教先の国の事情も違うので、滞在ビザを取得するのも簡単な話ではない。そのため、布教師の渡航許可や滞在ビザの取得を念頭において文化活動が考えられたこともある。また布教先の国において布教公認を得るためには社会的な貢献なども行い、有益な宗教団体であると認知してもらえるようにならなければ、布教は難しいのである。つまり「海外布教」と「文化活動」というのは一見、つがなりがないように見えるが、実は文化活動は布教を側面から支えることは大いにあるのである。

海外布教への架け橋

海外で布教師として長期滞在し、現地で法的にも認めてもらうために、文化活動がその足掛かりとなりうることは想像に難くない。現地の人々と文化活動を通じて接点を作り、天理教が日本文化の一つではなく、人類共通の文化であるという認識を現地の人々に最終的に持ってもらうことがポイントでもあろう。具体的には様々な活動を通して信頼関係を築き、話も聞いてもらえるようになるのが第一である。そこからさらに深く教えを身につけて、親神が望む陽気な明るい社会を築ける人に成人してもらえるように導くことが理想的である。これらは海外の拠点の中でも布教が公認されておらず、布教の歴史も浅い国での話である。言い換えれば、天理教の布教“にをいがけ”の第一歩であると言える。パリに天理日仏文化協会ができ、今年で50年である。多彩な文化活動を続け、信頼度も上がり、現在も活発に活動を続けている。文化協会に関わってきた多くの先人の努力が花開き、「TENRI」が浸透し、受容されてきていると言えるのではないだろうか。

現地信者や子弟の育成

布教師は日本から出向いていって、まずは布教のための基盤を築こうとする。現地や現地の人に受け入れられ信者ができてくる。すると、現地生まれで現地育ちの子弟の育成が重要になってくる。彼らは布教する上で言葉の問題もない。日本から布教師が出向くのではなく、現地生まれの現地育ちの布教師が現地で布教する。こうして第二段階へと進める人材を育成していくのである。第二段階へ移行せずに、いつまでも日本から布教師を送り続けていては、投入した努力に見合う結果は得られない。いつまでたっても日本から人を送り続けるのではなく、現地の人々へとバトンタッチして、また共働して、陽気づくめの社会を現地で築けるように働きを進めていくことが大事なのである。またそれができるのは、現地生まれの人々である。天理教海外部ではその部分にも力を入れ、海外の子弟を受け入れ、育成してきて今日に至っている。天理教語学院もまた、そういった子弟の育成に力を注いできた。

様々な文化活動

文化活動と言えばどんなものを浮かべるだろうか。人によって思い浮かべるものはそれぞれ違い、言語、芸術、音楽、芸能など多種多様にあるだろう。天理教はこれまで、日本文化紹介、日本語教室、ギャラリー、コンサート、柔道教室など、多様な文化活動を展開してきた。各拠点でそれらの活動が評価され、表彰を受けたということも数多くある。こうして続けられてきた文化活動であるが、「布教」という視点から見れば、これらはあくまで入り口であり、現地の人々との接点にすぎない。結局は人と人のつながりであり、この人の勧めることなら大丈夫だと深い信頼関係ができて、初めて信仰の話も聞いてもらえるものなのだろう。筆者は、人と人のつながりというものは、お互いに共通するものを持ち、その共通するものを通じて、つながりが強化されていくものではないかと考える。スポーツでも音楽でも芸術でも日本語教育でもその媒体となる文化的な活動を通して、人と人とつながり、活動を続けていく中でさらに深い信頼関係も構築されていくものではないだろうか。

今後の展開

海外布教を主眼に置く時、重要なのは第二段階を担う人材の育成である。言い換えれば、「現地化」が重要だということである。伝道庁がある拠点では、多くの現地信者が中心となってその活動も行っている。天理大学選科・別科時代を経て、現在は天理教海外部に属する天理教語学院となったが、そこで学んで帰国後、現地で中心となっている人材が多くいる。伝道庁が設置されている地域は布教の歴史も長く、ほぼ現地化している。したがって現地からおぢばへ来て学び、帰国後はおぢばで学んだことをもとに、共に学び合った仲間と知恵を絞りあい、布教活動を展開する形に持っていくことが重要ではないだろうか。伝道庁があるアメリカやブラジル、韓国や台湾の学生を見ていて、そんな思いを強くする。彼らが卒業後、夏の「こどもおぢばがえり」で子供たちを引率して帰参する姿を毎年見るたびに、とりわけその思いを強くするのである。